

教 育 研 究 業 績 書		
2023年 5月 1日		
氏名 脇田 泰章 印		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
成人看護学	リハビリテーション看護、臨床看護、継続教育	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例	平成30年4月- 平成31年4月- 令和2年4月- 令和3年4月- 令和4年4月- 令和5年4月-	科目「健康行動とヘルスプロモーション」、実習「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」に担当者としてかかわる。 科目「ヘルスアセスメントⅠ」に担当者としてかかわる。 科目「ヘルスアセスメントⅡ」「成人高齢者看護援助Ⅰ」「成人高齢者看護援助Ⅱ」「情報と看護展開Ⅱ」「生涯発達における援助技術」「看護展開導入演習」、実習「基礎看護学実習Ⅲ」「成人・高齢者看護学実習Ⅰ」「成人・高齢者看護学実習Ⅱ」「成人・高齢者看護学実習Ⅲ」に担当者としてかかわる。 科目「情報と看護展開Ⅲ」「看護課題の探求」「看護展開統合演習」、実習「統合実習」に担当者としてかかわる。 科目「救急法の理論と実際」に担当者としてかかわる。 科目「ヘルスアセスメント」「成人高齢者看護援助Ⅰ（慢性期・終末期）」に担当者としてかかわる。
2 作成した教科書，教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 大学および3年課程の臨地実習での学生指導	平成24年4月- 平成30年3月	以下の臨地実習に毎年臨地実習指導者として直接学生指導にかかわった。 1. チームワーク入門実習：多職種で共同し連携していくための基礎を学習する。多職種連携教育コース。 2. 看護学総合実習（基礎・成人/H21年度カリキュラム名課題別実習）：学習を統合応用し、さらに深めた課題を選択し深く学習する。 3. リハビリテーション看護学実習（H21年度カリキュラム）：リハビリテーションを必要とする健康障害を持つ人と家族に個別的に援助するための知識・技術を習得する。 4. 慢性期看護実習（H21年度カリキュラム）：慢性期の健康障害を持つ老年期にある人と家族に個別的に援助するための知識・技術を習得する。
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格，免許 看護師免許 保健師免許	平成16年4月 平成16年4月	第1289228号 第122934号
2 特許等		

3 実務の経験を有する者についての特記事項 修士を取得後、院内の継続教育プログラム3年目「看護研究」の支援 H26年度から看護部教育研究委員：院内の継続教育プログラムの運営	平成24年4月-平成25年3月	入職3年目の教育プログラム支援。看護研究の対象者1名が行う研究「インシデントレポートから見えてきた転倒・転落の特徴と対策」の全般（研究計画、データ収集、分析、考察）の支援を行った。
	平成25年4月-平成26年3月	入職3年目の教育プログラム支援。看護研究の対象者1名が行う研究「入院業務の実態調査」の全般（研究計画、データ収集、分析、考察）の支援を行った。
	平成26年4月-平成29年3月	入職1年目の教育プログラムを担当。毎月第4金曜に新任看護師4名の研修を調整・評価した。研修内容は「病態生理・看護①脳性まひ②脊髄損傷③脳血管疾患」「救急蘇生法」「皮膚・排泄ケアの基本」「看護過程①②（コンピューター研修を含む）」「医療安全」「FIM」「リハビリテーション看護②③フォローアップ研修」「他ユニット研修」の12項目。
	平成27年4月-平成29年3月	入職3年目の教育プログラム支援。看護研究の対象者1名が行う研究「プライマリーナースとしての退院調整の理解と学習方法」の全般（研究計画、データ収集、分析、考察）の支援を行った。
4 その他		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
(学術論文) 1. わが国における手術を受ける高齢患者の安楽(Comfort)に関する統合的文献レビュー	共著	令和4年3月	常磐大学、常磐看護学研究雑誌第4巻	周手術期において苦痛や不快を感じている高齢患者が、看護師のどのようなケアによって安楽(Comfort)を感じたのかを見出すことを目的として、『医学中央雑誌Web版』にて、「高齢者」「心地よさ」「看護」、「高齢者」「手術」「安楽」、「急性期」「安楽」、「高齢者」「手術」「心地よさ」をキーワードに過去10年間の国内文献を対象として検索した。8件の文献から、周手術期において苦痛や不快を感じている高齢患者は、看護師から鎮痛剤を用いた対応、温罨法を用いたケアを受け【症状が緩和する】ことで【安心】する、など看護師のケアと患者の身体的変化、安楽(Comfort)な状態について、他5つが抽出された。 共著者：小澤尚子 及川けい子 脇田泰章

2 回復期リハビリテーション病棟看護師が家族への退院支援について感じる困難の実態 (研究報告)	共著	平成30年11月	日本リハビリテーション看護学会誌	<p>(学術論文) 2を加筆修正し、回復期リハビリテーション病棟での看護による家族への退院支援の実態とその関連要因を明らかにすることを目的にし、再分析を行った。その状況は3因子構造に分類され、『家族内の人的資源が不足している状況』、『病院への期待が強い状況』、『退院後の医療福祉が調整できない状況』であった。また明らかとなった関連要因から、退院支援で看護師が持つ困難感の軽減のためには、自らのとりやすいコーピングパターンを意識化し適切に患者家族の退院支援と向き合うこと、また、経験年数のある看護師へのサポートの重要性が示唆された。</p> <p>担当部分：研究代表者・研究総括、全文を執筆 共著者：脇田泰章 市村久美子 川波公香</p>
3 回復期リハビリテーション病棟の退院支援における看護師の困難感とその要因 (修士論文)	単著	平成24年3月	茨城県立医療大学大学院	<p>脳卒中患者の家族への退院支援において、回復期リハビリテーション病棟の看護師の困難感とその影響要因を明らかにするため、11施設の看護師151名にアンケート調査し、111部を回収した。9割の看護師が困難を感じ、その状況は3因子構造に分類され、『家族内の人的資源が不足している状況』、『病院への期待が強い状況』、『退院後の医療福祉が調整できない状況』の順で、看護師の困難感は強かった。影響因子は、看護師としての経験年数とコーピングであった。</p>
4 回復期リハビリテーション病棟における複数回転倒する患者の関連要因	共著	平成25年10月	ひろき：茨城県立医療大学付属病院研究誌16号 Page32-40	<p>複数回転倒患者の関連要因を明らかにすることを目的に、回復期リハビリテーション病棟入院中に転倒した患者108名を過去6ヵ月以内に1回転倒した単転倒群(80名)と2回以上転倒した複数回転倒群(28名)に分け、比較検討した。結果、関連要因は、「ふらつき」「意識障害」「半側空間無視」「うつ状態」「付属品がない」「トイレ介助が必要」「尿意・便意を我慢できない」の7項目と、転倒後に行われた「身体拘束」の介入であった。</p> <p>担当部分：研究代表者・研究総括、全文を執筆 共著者：脇田泰章 林恵美子 大塚裕子 関和江 糸嶺一郎 中村摩紀</p>
5 地域医療との連携強化に関する研究	共著	平成27年10月	ひろき：茨城県立医療大学付属病院研究誌18号 Page62-70	<p>在宅移行に伴う病院と地域の看護ケア変化を検討するため、重度障害者施設基準一般病棟を退院する患者が利用する訪問看護事業所の看護師3例にインタビュー調査を行った。退院後、患者や家族の状況の変化があり、訪問看護師は介入しており、入院中の経過に加えアセスメント・評価の情報提供、リハビリテーション専門分野の相談役割が期待されていた。また、入院中の処置や療法、生活状況を見る機会を希望していた。地域ケアカンファレンスへの病院担当者全員の出席、連携窓口の統一、電話連絡時の円滑な対応が望まれた。</p> <p>担当部分：研究代表者・研究総括、全文を執筆 共著者：脇田泰章 渡辺明子 三堀美智子 津留崎誠 川波公香</p>

<p>(その他) 発表 「学会発表等」 国内の放課後等デイサービスにおける馬介在療法の文献検討</p>	一	令和4年2月	第25回茨城県総合リハビリテーションケア学会学術集会	放課後等デイサービスにおける馬介在療法の効果が利用する障害児の生活にどう活かされるのか分析することを目指し、その資料とするために、国内文献16件の検討を行った。結果、その効果には、バランス感覚、歩行など身体的機能改善とリラックス効果、発達障害児の問題行動改善といった情緒面の安定を含む障害児の心身の成長発達に寄与していた。家族にとって、馬介在療法の場は家族同士の交流の場であった。馬介在療法による効果を客観的継続的に評価しフィードバックすることが、障害児の生活に取り入れるため必要な介入であり、その役割を看護職が担うことが求められていると考えた。 共著者：脇田泰章、海野潔美
<p>緩和ケア病棟の退院支援における新型コロナウイルス感染拡大の影響—緩和ケア病棟運営関連データにおける感染拡大前後の比較から</p>	一	令和4年2月	第37回日本がん看護学会学術集会	緩和ケア病棟においてCOVID-19が退院支援に与えた影響を運営関連データの感染拡大前後の比較から調査した。結果、COVID-19診療用病床を確保するため病院全体の入院数が減少したことで緩和ケア病棟も稼働率が低下、面会制限により自宅療養を選ぶ患者家族が増えたことで病棟内死亡者の減少、在宅復帰率の上昇を認めた。感染拡大前よりも退院支援が多く求められることが示唆された。 担当部分：考察 共著者：角田直枝、大根田梨華、前田睦美、坂下聖子、柏彩織、田中和美、山崎道代、角智美、脇田泰章
<p>1回復期リハビリテーション病棟の退院支援における看護師の困難感とその要因</p>	一	平成24年6月	第38回日本看護研究学会学術集会 (開催場所：沖縄コンベンションセンター)	(学術論文) 2 に記した研究概要について発表した。
<p>2 回復期リハビリテーション病棟における複数回転倒する患者の関連要因</p>	一	平成25年11月	第14回日本医療マネジメント学会茨城県支部学術集会 (開催場所：つくば国際会議場)	(学術論文) 3 に記した研究概要について発表した。
<p>2中堅看護師への継続教育プログラムの構築に関する研究 A県立病院における学習ニーズ・教育ニーズ</p>	一	平成27年7月	第42回日本看護研究学会学術集会 (開催場所：つくば国際会議場)	中堅看護師のキャリア支援を目指した継続教育プログラム立案のため、学習ニーズアセスメントツール—臨床看護師用—と教育ニーズアセスメントツール—臨床看護師用—を用いて、実務経験6年以上の看護師にアンケート調査を行った。結果、有効回答数239件 (回収率73.0%)。学習ニーズは看護の基本的知識や技術・急変対応・感染対策などが高いが研究や社会情勢に関するニーズは低く、日々の業務に直接関係する内容が優先される傾向がみられた。教育ニーズでは、実務経験11-20年の看護師に対して専門職としてのキャリア発達に関する教育の必要性が示唆された。しかしその年代は、家庭での役割が重要な時期でもあり、計画的に仕事と家庭のバランスを調整できるようなキャリア支援の検討が必要であると考えられた。 担当部分：データ収集、分析考察 共著者：高村祐子 (筆頭)、吉良淳子、角智美、川畑みゆき、寺門通子、旭佐記子、脇田泰章